

樟蔭国文学

第 2 号

茶 道 と 定 家 安 田 章 生 (1)

日 本 靈 異 記 と 中 世 説 話 集 山 根 賢 吉 (16)

翻 刻 書 陵 部 藏 花 園 院 御 製 (光 嚴 院 御 集) 原 田 芳 起 (29)

伊 東 静 雄 に つ い て 岩 田 久 美 子 (40)

学 報 (46)

大 阪 樟 蔭 女 子 大 学 国 文 学 会

樟
蔭
国
文
学
第
二
号

茶 道 と 定 家

安 田 章 生

一 茶道の精神と定家

茶道が、その理念を形成確立するにあたって、和歌に多くのものを学んだことは、たとえば、

茶湯は仏法並びに歌道を兼ねたる由申し伝へ候。詠歌大概に情以新為先、詞以旧可用とあり。茶道は仏道・歌道かねたるものなり。新為先、詞以旧可用と定家卿書かれ候ごとく、道具は旧きを以て時の組合せはみな情を新しくするをよしとす。よく茶湯に叶ひ候とて、紹鷗、定家卿を賞美して、定家の色紙を用ひ候なり。

(『石州三百ヶ条』)

というような言にも、はつきりと述べられているところである。そして、その場合、右の言にもうかがわれるように、和歌のなかでも、『新古今集』ないしは定家に学ぶところが大きかつたのであつた。同じく、『石州三百ヶ条』は、茶の湯の「古今ノ名人」(『山上宗二記』)と称せられた、村田珠光、鳥居引拙、武野紹鷗の三人の茶道の精神を、『新古今集』所収のいわゆる三夕の歌によつて、次のように説明している。

珠光・引拙・紹鷗の心の事

此の三人共にもとづくところ趣向あり、

珠光は、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

この心を用ふ、これ則ちさびたる体を専にこれ用ふる也。利休愛す。

引拙は、

さびしきはその色としもなかりけり横立つ山の秋の夕暮

紹鷗は、

村雨の露もまだひぬ横の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

これ則ちすぎあげてさはやかなる体なり。道安好み紹鷗にもとづく也。これ、茶の湯根元なり。かくのごとく、いづれも宗匠そのもとづくところこれありて用ふ。後世、子弟たるものこの意味を常に工夫すべきこと也。

茶人たちが、その芸術精神ないしは理念を、『新古今集』の歌に見出していることは明らかだが、こうしたことを、さらにはつきりと述べている『南方録』の次の一節は、有名である。

紹鷗侘び茶の湯の心は、新古今集のなか、定家朝臣の歌に、

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕暮

この歌の心にてこそあれと申されしと也。花紅葉は、則ち書院台子の結構にたとへたり。その花紅葉をつくづくとながめ来りて見れば、無一物の境界浦のとまや也。花紅葉を知らぬ人の、初めよりとまやには住まれぬぞ、ながめながめてこそ、とまやのさびすましたる所は見立てたれ。これ、茶の本心也といはれし也。

紹鷗は、「三十マデ連歌師ナリ。三条道遙院詠歌大概之序を聞き、茶ノ湯ヲ分別シ、名人ニナラレタリ。是ヲ密伝ニス。印可之弟子伝ヘラルルナリ。」(『山上宗二記』)と伝えられるように、若い頃は連歌師であり、三条道遙院(三条西実隆)に歌を学んで、定家の『詠歌大概』の講義も聞いているのである。紹鷗が『詠歌大概』から学んだところは、とくに「情以新為先、詞以旧可用」という一節にあつた模様で、そのことは、先に引用した『石州三百ヶ条』の一文に見られるとおりである。(同書は、また、このことに触れて、「定家の筆を用ふる

こと、詠歌の大概、情以新為先、詞以旧可用とあるを、紹鷗これを好み、茶道もかくの如く道具は旧きを用ひ、その時節の働きて心を新しくする也とて、小倉の色紙をかけてより、専ら定家を用ふる也。」とも述べている。そういう紹鷗が、『新古今集』所収の定家の「見わたせば」の歌に、「侘び茶の湯の心」を見出していたのである。定家のこの歌が、華美なものを超脱した、枯淡・幽寂の美を発掘してみせていることは確かであるが、そのことを明確に意識し、そこに自らの芸術精神の源流を見出しているのが、右の紹鷗の言だといえるわけである。

右の文につづいて、『南方録』は、また、次のようにしるしている。

また、宗易いま一首見出したりとて、つねに二首を書きつけ、信ぜられしなり。同集、家隆の歌に、

花をのみ待つらん人に山里の

雪間の草の春を見せばや

これまた相加へて得心すべし。世上の人々その山かしの森の花がいつ咲くべきかと、あけくれ外に求めて、かの花紅葉もわが心にあることを知らず、ただ目に見ゆる色ばかりを樂しむなり。山里は浦のともやも同然のさびた住居なり。去年一とせの花も紅葉も悉く雪が埋みつくして、何もなき山里になりて、さびすましたまでは、浦のともや同意なり。さてまた、かの無一物のところよりおのづから感を催すやうなる所作が、天然とはつればつれにあるは、埋みつくしたる雪の春になりて陽氣をむかへ、雪間の処々にいかにも青やかなる草がほつと二葉三葉もえ出たるところとく、力を加へずに直なるところのある道理にとられしなり。歌道の心は子細もあるべけれども、この両首は紹鷗、利休、茶の道にとり用ひらるる心入れを、聞き覚え候てしるしおく事なり。

さらに、『壺中炉談』は『南方録』の言として、次のように伝えている。

紹鷗・利休の茶の意味は、

定家卿

見たせば花ももみぢもなかりけり、浦の苦ツの秋の夕暮

家隆卿

花をのみ待つらん人に山ざとの、雪間の草の春を見せばや

といへる。この兩首よくかなへりとして、常に沈吟せられしとかや。宗啓の詠に、

花もみぢ苦やもうたもなかりけり、唯見わたせば露地の夕ぐれ

利休は、紹鷗が発掘した定家の歌に加えて、家隆の歌一首（この歌は、『南方録』には『新古今集』の歌としているが、同集には見えず、家集の『壬二集』および『六百番歌合』に見えるものである。）にも佗び茶の湯の心を発見し、その二首をつねに誦していたというのであり、南坊宗啓は、右の定家の歌を踏まえて、茶道の精神を表現した歌を詠んだというのである。この宗啓の歌の「うた」とある個所は「うら」の誤写であろう。「花紅葉」も「苦屋」も「浦」もなき、茶庭の「露地の夕暮」のわびしい風景に、宗啓は、定家が「浦のとまやの秋の夕暮」に見出したのと同じ美を味わい、そこに茶の湯の真の精神は体得されるとしているわけである。紹鷗・利休・宗啓らに定家の与えた影響がいかに大きなものであつたかは、以上によつて明らかであるといわねばならぬ。ということとは、すなわち、佗び茶の湯は、その根本的な理念の形成にあつて、定家に多大のものを負つてゐるということである。

なお、『詠歌大概』あるいは『新古今集』が茶人たちに読まれ、影響をも与えていたことについては、右の他にも、『茶話指月集』の「自叙」中に河東散人鶴巢（久須見疎安）が、

偶、此の道を問ふ人あれば、答へていはく、本来、禪によるがゆゑに、更に示すべき道もなし、ただわが平生かたり伝ふ古人の茶話を以て指月とせば、おのづから得ることあらんと、かの京極・黄門、和歌二無二師

匠一、只以二旧歌一為二師一とのたまひしも、道異にして理は同じかるべし。

というように『詠歌大概』の一節を引用しており（このことが、先にあげた紹鷗に学ぶものであつたことは明らかである）、また、福井随時が著した『普公茶話』中には、普公すなわち杉木普齋の真蹟として、次のような一

節を掲げている。

宗且先生の古歌を集め数奇に入りたる歌とて卅六首有之、先年、野老上京の砌り宗且老自筆の敷紙三十六枚手に入申候処、一・二枚づつ人々所望によりまゐらせ候。残り敷紙ハ成のとし大火事に焼失申候。右の古歌の内、覚え有之分書付置也。

常よりもしのやの軒に埋もるる今日は朝に初雪やふる

ふり初むる今朝だに人の待たれつる深山の里の雪の夕暮

尋ね来て花にくらせる木の間より待つとしもなき山の端の月

山寺の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞちりける

薄霧のまがきの花の朝じめり秋は夕べと誰かいひけん

とふ人もあらし吹きそふ秋はきて木の葉に埋む宿の道芝

口惜しや六首ならでは覚え侍らず、伝聞、古織は詠歌大概より数奇道に入り給ふとあれば、予こそ無下なれ、猶渡世詠吟する人やあらんと書きしるし置く事しか也。

右の記によれば、利休の孫である千宗且が「数奇に入りたる歌」として書き集めていた三十六首の古歌のうち六首を、普齋が記憶するままに書きとどめていることとなる。さて、その六首は、すべて『新古今集』所収のものであつて、作者名を右の歌の順序に従つてあげると、胆西上人・寂蓮・雅経・能因・清輔・俊成女となる。

(詞句が、おそらく筆者の記憶違いのために少し誤記されており、一首目は「常よりもしのやの軒ぞ埋もるる今日は都に初雪やふる」、四首目の第一句は「山里の」というように、現存の『新古今集』ではなつてゐる。)そして、これから推察すれば、残りの三十首の歌もすべて『新古今集』の歌であり、そのなかには、当然、定家の作もあつたのではないかと考えられるのである。ともかく、宗且が、右のような『新古今集』の歌に、茶道の精神を見て取つていたことは明らかである。また、古織すなわち古田織部が『詠歌大概』を詠むことから数奇道に入つたことを、右の記は伝えてもいるのである。

「茶道と定家」という問題は、以上のことでその重要な点は尽きているといえる。しかしなお、附随的な問題として、定家の書が茶道の名物として尊重されたということがあるので、節を改めてそのことについて展望しておこう。

二 名物としての定家の書

定家の書が、茶道において名物として尊重されたということは、彼が茶道の芸術精神の上から尊敬されていたということと、その書自体のおもしろみということとに由つているものと考えられる。

定家の書は、彼自身は悪筆と思つていたらしく、「平生所レ書之物、以レ無_レ落字ニ為_二悪筆之一得_一」(『明月記』寛喜三年八月十八日)と述懐している。『兼載雑談』にも、「世尊寺の家には、手跡を本とすれば、歌などはかきちがへたれど、よく書きたると思はれし時は、そのままにて出されき。これ嗜家故也。定家などは、歌を本とせられければ、手をば何とも思はれざるなり。」とあるから、兼載も、定家の書をとくにすぐれたものとは考えていなかったことがわかる。あるいは、応永二十七年(一四二〇)に成つた『海人藻芥』(恵命院宣守著)にも「定家卿ト云フ名人ノ手跡、以テノ外ノ悪筆也。然レドモ明月記ト云フ名譽ノ記録六合、皆自筆也」とあつて、「悪筆」だとしている。この論は、その後、近世に入つても『文会雑記』(湯浅常山著)に引用されており、同書にはなお、

定家ヲ悪筆ト古来ヨリ云ヘリ。イカニモ此ノ如クウチツケテ書キテ、早書ニ大分書写セラレタル処ヨリ、定家流ト云フ一流ノ悪筆が出来タリ。コレモ歌学ニテ人ノ賞翫スルナリ。(卷之三)

京極黄門ハ拙筆ナリ。シカルニ世ニ珍宝トスル事ハ、和歌ヲ以テノ故ナルベシ。南郭先生イハク、定家卿拙筆ナレドモ、和書と歌ノ字、幾部ト云フ事ヲ知ラズ書カレタルト見エタリ。ソレ故ニオノヅカラコナレテヨク見ユト、尤モ然ルベキ説ナリ。(附録)

とあつて、ほぼ同様の意見が述べられている(右の文中の南郭先生というのは、湯浅常山の師である服部南郭を

さす)。

しかし、一方、室町時代には『定家卿筆諫口訣』という偽書も現われているのであるから、その頃には定家の書は、筆蹟の上からも注目されるようになっていたものと見られる。さらに、永祿二年(一五五九)に書かれた『塵塚物語』には「手跡はよろしからざるといふこと応永の比の記に粗見え侍れど、苦しかるまじきことなり。

古来より名人の筆蹟あしき人もまま伝へ聞き侍り。その上、いま彼卿の筆法を見るに、多く文字の品変りてさまざまに書かれ侍る。凡そ五六品にもわかれて見ゆ。今様の人のさらに及ぶべくもあらず。あしきといへるも、故あるべき歟。就中、上根無双の人にて侍るにや。多く他家の記録を見るに、黄門の明月記ほどくはしきはなし」とあつて、定家の筆蹟を弁護している。また、近世に入つて、小宮山昌秀の『楓軒偶記』には「小倉ノ色紙真蹟、吾公ノ府ニモ蔵メラル。翠軒一覽シテ甚ダ感ジ、古ハ此ノ如キ能書モアル事ニヤ、コレニ対シオボエズ身ノ毛ヨダツヤウニ覚ユト言ヘルト、飯島均平言ヘリ。」と見えていて、水戸徳川家の治保の蔵していた小倉色紙の書を見た立原翠軒(水戸の藩儒)が「能書」と感嘆したことを伝えている。あるいは、本居宣長も『玉勝間』で、『海人藻芥』の説を引用したあと、「そもそも定家ノ卿の手を、悪筆也といへる、いとめづらしく、あやしき事也、今の世の人は、すべてわれがしこに、かくさまに物をいひおとすたぐひ、つねの事なれど、これはさるたぐひとは聞えず、そのかみの世の人のさだめには、まことに悪^アとしたりしにこそ、」(十一の巻)と述べて、定家の筆蹟を賞しているのである。

このように、讚美するものと否定するものとに分かれていた定家の書であるが、それは茶道において尊重されたのであつた。ところで、定家の歌に限らず、歌というものが茶の湯の会の掛物として用いられるようになったのは、いつ頃からであろうか。そのことについて、『槐記』は、利休の頃からであるとして、その享保十三年(一七二八)三月二十二日の記のなかに、

昔ノ茶湯ニハ、墨跡バカリニテ、歌ノ物ヲ掛ケタルコトハ、利休ガ時分ニ、或茶人ガ利休ヲ招請シテ行ハレシガ、中潜ヲ開キタレバ、草茫タトシテ飛石モ見エ難キ程ナリ、如何ナル態ニヤト推シテ、漸クニ草搔分ケ

テ入ラレシガ、鉢前ハ奇麗ニ掃除シテアリケル故、如何ニモ訳アリケリト、中ニ入りテ床ヲ見ラレタレバ、其ノ家ノ重代ニ、定家ノ小色紙ヲ所持シタリシガ、此ノ色紙ガ八重葎ノ歌ナリシカバ、利休モ尤ナリトテ感ジタリシガ、是レ哥ノ掛物ノ掛ナリト申ス。御前（注、家熙をさす）ノ御説ニハ、利休が太閤秀吉ヲ招請シテ、初メテ定家ノ小色紙ヲ掛タリ、其ノ哥ハ天の原ふりさけ見ればノ歌ナリ、秀吉ノ不審ナリシニ利休ノ返答ニ、此ノ哥ハ日本人が唐ニテ讀ミテ、月一ツニテ世界国土ヲ兼ネテ讀ミ尽シタル歌ナレバ、大灯、虚堂ニモ劣ルベカラズト申上ゲシヨリ、歌ノ物掛ケタルト御聞キナサレシ由仰セナリ。

としるしており、ここに、「或茶人」とあるのは、津田宗及をさすものと思われる。『山上宗二記』に、

紹鷗、定家色紙、今井宗久ニ在リ。下絵二月ヲ書ク也。安部仲丸ガ天ノ原ノ歌也。宗及色紙、下絵葎ナリ。八重葎ノ歌也。

右定家ノ色紙、下絵在ルハヨシ、下絵無キハ悪シ。

とあり（『茶器名物集』にも、同様の記が見える）、当時、宗及が右の文中に出てくる定家筆の八重葎の歌の色紙を所有していたことが明らかだからである。しかし、先にも引用した『石州三百ヶ条』には、定家の『詠歌大概』の詞句に共感した紹鷗が、定家の小倉色紙を掛けたことを伝えている。また、『今井宗久茶湯日記抜書』には、そのことについて明確に年月日まで記録している。すなわち、天文二十四年（一五五五）十月二日に紹鷗老御会があり、宗久・宗二の二人が参会しているのであるが、その時、「床 定家色紙 天ノ原、下絵二月ヲ絵ク」となっていたのであり、右の『槐記』がしるしている「あまのはらふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌を書いた定家の色紙が掛けられていたことがわかるのである。この定家筆の色紙は、先に引用した『山上宗二記』『茶器名物集』の記から察するのにも、紹鷗よりその女婿の今井宗久に譲られ、さらにその後の何かの機会に利休に伝えられたものと考えられる。しかし、それはともかくとして、茶の湯の会に歌を掛けるというのを、利休は紹鷗から学んだものである。ただ、こうしたことは、当時、未だ一般にはおこなわれてい

なかつたのであつて、利休が秀吉を招いて催した茶の湯の会（それがいつのことであるか、正確な年時は判明しないけれども）を、おそろくきつかけとして、定家の歌ないしは書は、茶会に掛けられることも多くなり、広く尊重されるようになったものと考えられる。また、当初は定家の書いた小倉色紙あるいは定家の歌を掛けたのであつたが、次第に定家の書であれば、歌以外のものでも尊重して掛けることになつたようである。そのことは、元禄期の頃に成立した『茶話指月集』に、当時の世におこなわれた名物を列記したなかに、

一定家卿八条院文

写、八条院於御会、愚詠趣御尋、得微笑指落月、老ぬやとおもふばかりに打かすむ心の外の春のよの月とよみたまひ候、

極不審共先安堵了、聊於龍楼可申披候也、謹言、

二月十六日

定家

式部権太輔殿

一同慶賀文

写

慶賀事

右久積鳳闕左使之旧勞、遍浴虎賁中郎之朝恩、自愛無極候之処、今預賀札、殊抽感懷、立昇るたつの心ハおもひやれかひある御代のわかのうらなみ

併期拜謁之次、恐々謹言、

廿六日

左中将定

をあげ、そのあとに、

頃老友ノ物語ニ、予ガ若キ時分、定家ノ掛物トイヘバ、先小倉色紙・安楽庵ノ懷紙ヲ称シツルガ、次第ニ向上ニナリテ、今ハケ様ノ文ハ小倉ニモ劣ラヌ名物ト、人ノモテ囃侍ル也、

ともしるしていることによつてわかるのである。

右の「小倉色紙」すなわち定家の筆による小倉百人一首の色紙については、『茶話指月集』より早く、万治三年（一六六〇）に刊行された『玩貨名物記』には、その所蔵者名と共に、「あしひきの」（柿本人麿）「これやこの」（蟬丸）「つくばねの」（陽成院）「たちわかれ」（中納言行平）「このたびは」（菅家）「をぐらやま」（貞信公）「ありあけの」（壬生忠岑）「たれをかも」（藤原興風）「わすらるる」（右近）「しのぶれど」（平兼盛）「こひすてふ」（壬生忠見）「あひみての」（権中納言敦忠）「あはれとも」（謙徳公）「ゆらのとを」（曾禰好忠）「やへむぐら」（惠慶法師）「きみがため」（藤原義孝）「かくとだに」（藤原実方朝臣）「あらざらむ」（和泉式部）「おほえやま」（小式部内侍）「いにしへの」（伊勢大輔）「うかりける」（源俊頼朝臣）「せをはやみ」（崇徳院）「ほととぎす」（後徳大寺左大臣）「よのなかよ」（皇太后宮大夫俊成）「よもすがら」（俊恵法師）「たまのをよ」（式子内親王）「こぬひとを」（権中納言定家）「ひとをもし」（後鳥羽院）という二十八枚をあげており（同書の記載順は、所蔵者の格式順に従っているように見えるが、ここには、いわゆる「小倉百人一首」の記載順に従つて、掲げた）、当時、少なくともこれだけの色紙が存在していたことが知られる。また、「安楽庵ノ懐紙」というのは、京都の誓願寺竹林院に住んでいた安楽庵策伝が所有していたもので、『松屋名物集』『玩貨名物記』にも明記されていて有名な、「たちかへる夢のただちにをしへおこうてなのはなのすゑのうはつゆ」という歌を書いた定家の懐紙である。（後にもあげるように、『松屋名物記』によると、寛永六年六月五日に、この歌を掛けて茶会がひらかれている。）

いま、茶会の主な記録類によつて、床の掛物に定家の書が用いられた茶の湯の会を調べてみると、次の如きがあげられる。

天文二十四年（一五五五）十月二日、紹鷗の会に定家の色紙（「あまのはらふりさけみれば……」の歌であること明記）を掛く。（『今井宗久茶湯日記抜書』）

弘治三年（一五五七）三月二十九日、宗達の茶会に定家の色紙を掛く。（『宗達茶湯日記自会記』）

- 永祿元年（一五五八）三月三日、宗達の茶会に定家の色紙を掛く。（同）
- 同二年（一五五九）三月二十五日、道叱の茶会に定家の色紙を掛く。（『宗達茶湯日記他会記』）
- 同三年（一五六〇）正月十三日、宗湛の茶会に定家の色紙を掛く。（同）
- 同六年（一五六三）三月二十七日、道叱の茶会に定家の色紙を掛く。（同）
- 同九年（一五六六）十一月十五日、紹有の茶会に定家・家隆の住吉において詠んだ歌三首を掛く。（『宗及茶湯日記他会記』）
- 同十二年（一五六九）十一月十日、宗圭の茶会に、定家の歌を掛く。（同）
- 元龜三年（一五七二）正月六日、宗及の茶会に定家の色紙を掛く。（『宗及茶湯日記自会記』）
- 同年十二月五日、宗訥の茶会に、定家の色紙（「こぬ人をまつほの浦の夕風にやくやもしほの身もこがれつ」という自作の歌であること明記）を掛く。（『宗及茶湯日記他会記』）
- 天正元年（一五七三）十二月二十九日、宗甫の茶会に定家の色紙を掛く。（同）
- 同六年（一五七八）五月二十四日、宗及の茶会に定家の色紙を掛く。（『宗及茶湯日記自会記』）
- 同年十月十三日、撰州茶屋で宗及一人の茶会に定家の色紙を掛く。（『宗及茶湯日記他会記』）
- 同七年（一五七九）正月八日、明智光秀の陣立の茶会に定家の色紙（「淡路島かよふ千鳥の……」の歌であることと明記）を掛く。（『今井宗久茶湯日記抜書』）
- 同年四月二十三日、知足院慶三の茶会に定家の判詞を掛く。（『松屋会記』）
- 同八年（一五八〇）九月十八日、宮法の茶会に定家の色紙（「嵐吹く三室の山の……」の歌であること明記）を掛く。（『宗及茶湯日記他会記』）
- 同九年（一五八一）正月十日、明智光秀の茶会に定家の色紙（「淡路島かよふ千鳥の……」の歌であること明記）を掛く。（同）
- 同年十一月三日、知足院慶三の茶会に定家の判詞を掛く。（『松屋会記』）

- 同年十二月十九日、宗及の茶会に定家の色紙を掛く。〔『宗及茶湯日記自会記』〕
- 同年（一五八二）正月二十五日、明智光秀の茶会に定家の色紙を掛く。〔『宗及茶湯日記他会記』〕
- 同年十一月（一五八三）九月十六日、秀吉興行の茶会に、定家の色紙を入手す。（同）
- 同十四年（一五八六）十月二十日、豊臣秀長の茶会に定家の色紙〔「ゆらのみなとの」の歌であること明記〕を掛く。〔『松屋会記』〕
- 同十五年（一五八七）正月七日、立左の茶会に定家の色紙を掛く。〔『宗湛日記』〕
- 同年九月、宗及の茶会に定家の色紙〔『山上宗二記』に「宗及色紙下絵葎ナリ、八重葎ノ歌也」とあるものと推定される）を掛く。（同）
- 同年三月八日、宗及の茶会に定家の色紙を掛く。〔『宗及茶湯日記自会記』〕
- 同年三月十一日、道叱の茶会に定家の色紙を掛く。〔『宗湛日記』〕
- 同年六月十三日、宗及の茶会に定家の色紙を掛く。（同）
- 同年十月九日、石田三成の茶会（三成が所用のため催されなかつたが）に定家の色紙を掛く。（同）
- 天正十九年（一五九二）十二月二十三日、宗方の茶会に定家筆の後撰集切れを掛く。〔『松屋会記』〕
- 文禄二年（一五九三）正月二十七日、宗凡の茶会に定家の色紙〔「やへむぐら」の歌であること明記〕を掛く。（『宗湛日記』）
- 慶長二年（一五九七）三月八日、宗凡の茶会に定家の色紙を掛く。（同）
- 同十年（一六〇五）六月十五日、宗凡の茶会に定家の色紙〔「やへむぐら」の歌であること明記〕を掛く。（同）
- 元和四年（一六一八）正月十三日、秀政の茶会に定家の詩歌を掛く。〔『松屋会記』〕
- 同六年（一六二〇）四月十三日、秀政の茶会に定家筆の朗詠の切れを掛く。（同）
- 寛永元年（一六二四）八月二十六日朝、小堀遠州の茶会に定家の歌を掛く。〔『小堀遠州茶之湯置合之留』〕
- 同年九月十三日晚、遠州の茶会に定家の初雪の歌を掛く。（同）

同二十一日晩、遠州の茶会に定家の「あはぬよの歌」（注、『古今集』卷第十三に見える、よみ人しらずの「あはぬよのふる白雪とつもりなば我さへ共にけぬべきものを」の歌を書いたものかと推定される）を掛く。（同）

同二十二日朝、同じく。（同）

同二十三日朝、同じく。（同）

寛永四年（一六二七）七月六日、秀政の茶会に定家の書を掛く。（『松屋会記』）

同六年（一六二九）正月十六日、宗有の茶会に定家筆の後撰集切れを掛く。（同）

同年六月五日、安楽庵の茶会に定家の懐紙（たちかへるゆめのただちにをしへおくうてなのはなのすゑのうはつゆ）の歌、現存の『松屋会記』には第一句を「たらちねの」と誤記）を掛く。（同）

同年十一月十三日、以策の茶会に定家の歌切れを掛く。（同）

同九年（一六三二）四月十三日晩、遠州の茶会に定家草枕墨跡を掛く。（『小堀遠州茶の湯置合之留』）

同年十月五日、三宅寿齋の茶会に定家の色紙（俊忠の「山もりよなげきといへばふし柴もながめがしはもわきてやはこる」という歌を書く）を掛く。（『松屋会記』）

同十四年（一六三七）三月七日、柳生但馬守の茶会に定家の小倉色紙（「うかりけるひとをはつせの……」の歌）を掛く。（同）

享保九年（一七二四）十月二十三日、深諦院（東本願寺十六世光海大僧正一如）の茶会に定家の文（歌と文章との入り交ぜの文）を掛く。（『槐記』）

同年十一月六日、上田養安の茶会に定家の歌「たはつせの峯のまさか木ふきしをり風に曇る雪の山もと」（この歌は『続古今集』にも撰入されている歌であるが、同集や家集では一・二句が「をはつせや峯のときは木」となっている）を掛く。（同）

同十一年（一七二六）四月二十一日、上田養安の茶会に定家の文を掛く。（同）

同年九月十六日、保君様（家熙の子）の病氣全快祝いの会食に為家除目の切紙に定家が書き込みをした書を掛く。（同）

同十三年（一七二八）十一月十三日、深諦院の茶会に定家の懐紙を掛く。（同）

同十六年（一七三二）四月十五日、家熙の所へ山科道安が行つたところ定家の文を掛く。（同）

同十七年（一七三二）正月七日、家熙の茶湯始に定家の除目の書付に定家の書込みあるものを掛く（先の為家の除目の切紙のことを誤記しているものかと推定される）。（同）

某年十一月十七日、利休の茶会に「定家卿降雪に」〔ふる雪にさてもとまらぬみかりのを花の衣のまづかへるらん〕の歌と思われる）を掛く。（『南方録』）

以上の記録によつて定家の書が名物として尊重されていたことは明らかであるが、とくに、「小倉色紙の茶会」と称されて、有名になつた茶会のことを、『提醒紀談』は次のように伝えている。

筑紫にて、関白秀次公、定家卿のかかせられたる小倉の色紙を求め得たまひ、さて、御座敷を改め色紙開きの御会あり。利休を上客にして、相伴三人あり。頃は四月二十日あまり一日の曉方の事なりしに、風炉の御茶の湯なり。人々座敷に入りてありけれども、短檠の火もなく、釜の沸音のみにて、いかにもしづしづとようだいなり。いかなる御作意ならんと思ひ居ける折りから、利休の居られし後の明障子に、ほのぼのとあかくなりしをふしぎに思ひ、障子をあげられければ、月影のあかり御座のうちにほのかにうつりけるまま、さればよと、にじりよりて見るに、小倉の色紙の御かけ物なりとかや。その哥に、

ほととぎす啼きつるかたをながむればただあり明の月ぞのこれる

誠に折にふれ、おもしろきこといはむかたなし。その時、利休その外の人々、さても名与ふしぎの御作意かなと同音に感じ奉りぬ。（備前老人物語）

右の歌は、いうまでもなく、定家の作ではなく、藤原実定の作である。しかしともかく、ここには、歌と書と茶とが渾然一体となつて作りあげている美的世界がある。先にも述べたように、茶道は、その根本理念を新古今

的世界——といつても、それが有している華美なる性格ではなく、その幽寂なる性格であるが——に求めたのであり、それは、和歌の精神を喫茶の世界に生かしたところで成立した芸術といえるのであるが、そのことの上に、定家が、その詩精神の点からばかりでなく、その書を通して、役立っていることは注目すべきである。

定家を尊敬していた茶人たちは、定家の歌ばかりでなく、『明月記』の如きも読んだり写したりしていたと見え、小堀遠州の書簡（松本栄一氏蔵）にも次のようなものが残っている。

先日者貴札ことに御庭の白玉一えだ贈被下候恵存候、其刻取紛事て御返事さへ不申候、所存ノ外ニ候、御暇之時分光駕可仰候、此中別ててまへ毎暇候て無音申候、然者当春御つぎ被下候、椿俄ニ御きりはなし候哉、かれ申候、かさねて台木可進候間昌侃へ被達、御つぎ可被下候、兼又先日かし申候明月記御暇なくいまだ御写なき由、をそくともくるしからず候、むざと書置申候間文字相違ノ処可在しと存候、恐惶

十一朔日（花押）

近世において、定家を最も尊重し、その影響を最も深く受けたのは、詩歌人ではなく、茶人であつたとい得る。そして、定家を頂点とする中世の詩精神を受け継いだ茶道が、その後のわが国の美意識に与えた深い影響を思うとき、この点からも、定家がわが美意識の歴史の上に占めている位置の重大さは容易に推察せられるのである。

日本靈異記と中世説話集

山 根 賢 吉

中古において「三宝絵詞」や「今昔物語集」に多くの説話を提供した「日本靈異記」は、中世の諸説話集とどの程度の関連を有しているのであろうか。もちろんここでいう関連とは、「日本靈異記」という説話集全体とある特定のの中世説話集全体との関連をいうのではなく、「日本靈異記」所収のある説話と特定のの中世説話集所収のある説話との関連を意味する。一般的にいつて、「日本靈異記」と中世の諸説話集との関連は中古に比して薄いといえるであろう。しかし各説話集の中には靈異記を出典とする説話、乃至源泉とする説話が散見することは事実である。本稿では次の四つの説話集との関連について述べようと思う。

- 1、宇治拾遺物語
- 2、古今著聞集
- 3、宝物集（七巻本）
- 4、観音利益集（金沢文庫本）

これは必ずしも年代順に並べたのではない。またこれ以外の説話集、ならびに「元亨釈書」などの僧伝類との関連については、他日稿を改めて述べることにしたい。

1 宇治拾遺物語

宇治拾遺物語卷六第一話（万治二年版本）「広貴、妻の訴に依りて、閻魔王宮へ召さるる事」が、日本靈異記下

卷「閻羅王示奇表勸人令修善緣第九」に關連のあることは夙に指摘されているところである。^{注一}靈異記の説話は、

藤原広足という者、神護景雲二年二月十七日、大和の国菟田の郡真木原の山寺において眠るがごとく死去した。三日にして蘇生し以下のことを語つた。俄に使者に召され深き河を渡つて樓閣に至つた。樓中に一人の人あつて、汝を召したのは、汝の子を懐妊したまま死して地獄にある妻が汝とともに苦を受けようとの意によるものであると告げられ、然らば妻のために法華經を写し講読供養しようと言へば、妻もそれに同意して帰路につく。門に至つてわれを召した人は誰であろうとの疑問を生じ、引き返して問えば、「われは閻羅王汝が国に地藏菩薩という」と答へ、うなじをなでて印点してくれたが、その指の大きさは十かかえあまりもあつた。蘇生後、広足は約束通り法華經を書写し、講読供養して妻の苦を救済した。

というのである。宇治拾遺はこのうち蘇生後の主人公の回想の部分——それも閻魔庁における部分——を中心としたもので、死去の年月日及び場所の記載を欠き、主人公の名も「広足」ではなく「広貴」となつてゐる。また回想の部分においても、宇治拾遺には閻魔庁に至る途中の描写及び王の指の大きさ述べた部分がない。人名については誤写ということも考え得られるし、以上あげた相違点は宇治拾遺の編者が適當に省略し、この説話において最もおもしろい部分——いうまでもなく閻魔庁における部分——だけを靈異記から抄出して和化したからであると考えられることは一往可能である。しかしその閻魔庁における部分を對比してみると、両者の間にはいくつかの相違点がある。靈異記によれば、主人公が閻魔庁に至つた時にはすでに妻は後に立つてゐる。ところが宇治拾遺では、主人公と王との問答があつた後に妻が呼び出されることになつてゐる。また会話の部分も

復告、依此女患事故、召汝耳。斯女可受苦六年之中、三年受、未受三年。今愁之白、孕於汝兒、而嬰之死故、今殘苦、与汝俱受。広足白言、我為此女、写法華經、講読供養、救所受苦。(日本古典全書による)

という靈異記の簡潔さに対し、宇治拾遺では、

王のたまはく、「妻の訴へ申す心は、われ男に具して、共に罪を作りて、かかる堪へ難き苦しみを受け候へども、いささかも我が後世をも申ひさぶらはず。されば、我一人苦しみを受けさぶらふべきやうなし。広貴をも諸共に召して、同じやうにこそ苦しみを受けさぶらはめと申すに依りて、召したるなり。」とのたまへば、広貴が申すやう、「この訴へ申す事、尤もことわりに候。おほやけ、わたくし、世を営み候間、思ひながら後世をば申ひ候はで、月日はかなく過ぎさぶらふなり。但

し、今に於き候ひては、共に召されて、苦しみを受け候とも、かれが為に苦しみの助かるべきに候はず。されば、此の度は暇を給はりて、娑婆に罷り歸りて、妻の為に、万を捨てて、仏經を書き、供養して、弔ひ候はん。」（日本古典全書による）

と、詳細になつており、広貴の発言などを納得させるに足る合理性をもっているが、右の靈異記本文に傍線を付した部分に相当するものは見当らない。これらは宇治拾遺編者の改作もしくは敷衍と考えるべきであらうか。しかも問題になるのは、宇治拾遺の説話末にある「日本法華験記に見えたとなん」という語句である。これを文字通りに受けとれば、うち聞きであることを意味しているであらう。しかし説話文学の場合、著者乃至編者が原典によりながら、その書名をうち聞きの記す場合があり得るのであつて、これによつて本説話が口承されてきたものを定着したとか、文献によつていつと決定することはできないと思う。ともあれこの説話は現存する鎮源の「法華験記」には見当らないのである。もつとも「扶桑略記」によれば、「法華験記」と称するものは、鎮源撰のものほかに、智源撰のもの葉恒撰のものがあつたのであるから、そのいずれかにこの説話が収められていたのではないかとも考えられる。

宇治拾遺にあつては、このように説話末に書名を示した例は甚だ乏しく、他に二例を数えるに過ぎない。その一つは巻五第四話に「往生伝に入りたりとか。」とあり、他は巻十三第十一話に「玄奘三藏天竺に渡り給ひける日記に、此の由記されたり。」とある。前者は匡房の「続本朝往生伝」を指し、その説話は同書によつていつと考えられる。後者は「大唐西域記」を指すと考えられるが、その説話は同書には見えぬ。^{注三} 乏しい例によつて断定はできないにしても、宇治拾遺の説話末の書名にどの程度の信憑性があるのかいささか疑問というほかはない。

時代はかなり降るが、広足蘇生説話は良観続編「^{三編}因縁地蔵菩薩靈験記」巻六にも見える。靈異記、宇治拾遺いづれにも一致しない点——たとえば妻が地獄に陥つた原因を嫉妬によるとしているような点——もあるが、内容は同一と見てよい。その説話末には「此事日本記ニモ見へ侍ルナリ人口ニアルコトナレバ子細ヲ述ルニヨバ

ズ」とある。「日本記」とは「靈異」の二字を脱したのか、あるいは他の何等かの文献を指すのか明らかでないが、「人口ニアルトナレバ」とあるように、中世末から近世初頭においては口承されていたことを物語つてい

注四

る。これによつて宇治拾遺の先の説話を考えてみると、この説話は書名を示したまま口承されてきたものではあるまいか。真鍋広濟氏によれば、靈異記の本説話は説話文学中に地藏尊の見える最初のものであり、地藏信仰が一般化する平安中期以降においてははかなく広く流布していたのではないか。宇治拾遺の説話はその伝承の一面面を示しているともいえるように思う。とはいへ、この説話が現存しない「法華験記」に収録されていなかったとはいえないであろう。本説話が地藏説話たり得るのは、「我閻羅王、汝国称地藏菩薩是也」（靈異記）の一語にかかつているのであり、この語を軽視すれば当然法花経靈験譚の一種となり得るのである。

結局堂々めぐりの感を免れないが、宇治拾遺の本説話が口承されていたものを記録したか、あるいは何等かの文献によつて記したかを決定することは、現存文献によつては不可能といつてよい。ともあれ宇治拾遺は靈異記を源泉としてはいるが、直接靈異記によつていないことは事実であろう。宇治拾遺の編者は靈異記を知らなかつたか、あるいは知つていてもそれを宇治拾遺編纂の資料として使わなかつたのではあるまいか。なお宇治拾遺にはこれを除いて靈異記と関連のある説話を見出せない。

2 古今著聞集

宇治拾遺の編者が靈異記を知らなかつたとすれば、反対に著聞集の編者成季は明らかに靈異記を読んでいる。著聞集巻十五、宿執第二十三「僧広清円久円善歿後説法華経事」の最後の部分に、

靈異記にもくまの山およびきんぶせんに誦経の觸饅あるよし見えたり。（岩波文庫による）

とある。これは靈異記巻下「憶持法花経者古著曝觸饅中不朽縁第一」をさしている。しかし著聞集にはこの部分以外靈異記と直接関連あるものを見出すことができない。巻二十、魚虫禽獸第三十にある「山城久世郡女助蟹報

「恩事」は、靈異記中巻の「贖蟹蝦命放生得現報縁第八」及び同巻の「贖蟹蝦命放生現報蟹所助縁第十二」の類話ではあるが直接の関連はない。著聞集の出典は本朝法華験記巻下「第二百二十三山城国久世郡女人」である。著聞集の編者は、宿執とか変化とか魚虫禽獸とかの項目を立てて説話の分類を行いながら、当然それらの中に含まれていいと思われる説話が靈異記にあるにもかかわらず、それらを除外したと考えていいのではなからうか。

3 宝物集（七巻本）

「宝物集」（七巻本）所収説話のうち、靈異記と何等かの関係があろうと思われるものを示せば次のようになる。（番号は便宜的に付したものである）。

〔宝物集〕

(1) 巻五 武蔵国玉火丸ノ事

中巻 悪逆子愛妻將殺母謀現報被惡死縁第三

(2) 巻六 讃岐国依女ノ事

中巻 閻羅使鬼受所召人之饗而報恩縁第二十五

(3) 巻七 魚八候八軸ニ変ズル事

下巻 禪師將食魚化作花経覆俗誹縁第六

以上のほか、全くの要約ともいふべき数行の文の中に靈異記と関連のあるものが認められる（これらについては後に述べる）。

(1) 武蔵国玉火丸ノ事

これと類似の説話は靈異記のほか今昔物語集（巻二十吉志火磨擬殺母得現報語第三十）にもある。一般に宝物集の説話は簡略である。それは言うまでもなく、本書が仏教理論の主張を中心とし、その理論の裏付けとして説話を用いていることによるのであろう。本説話も靈異記及び今昔所収のものに比して短文である。いずれも、妻への愛着断ち難く、母を殺害しようとしたが、かえって自ら地下に落入つたという話の大筋は一致しているけれども、宝物集と他の二説話集との間には顕著な相違が認められる。それは前者にあつては、主人公が太宰府に下り、その地において「思ハシキ妻ヲ設ケ」「障リヲ致シテ」上京するまいとして実母の殺害をはかるのである。

が、後者においては、妻は郷国にとどまつており、母とともに筑紫に赴いた主人公が、妻恋しさに耐えられず、母を殺してその喪によつて帰国しようとはかるのである。これは口承の間に変化したものであるうか。しかし後述するように靈異記によつたのではないかと考えられる説話がある以上、編者の改変か、あるいは資料として使用したテキストが乱れていたか、更にはテキストの本文を誤読したかのいずれかではないかと思う。改変とすれば、母を伴つて任地に下りながら妻を郷国に残しておくという靈異記・今昔の説話の形態を不自然と考えたからであろう。テキストが乱れていたらしいことは、主人公の名が靈異記、今昔ともに「吉志火磨」とあるの^{注六}に對し、宝物集には「玉ノ火丸」とあり、「玉」は「志」の誤写ではないかと思われるからである（もつともこれは宝物集が転写される間に誤つたとも考え得る）。また靈異記本文の「与妻俱居」から「離しジトテ」と誤読する可能性も考えられる（もつとも和漢混交文の今昔によつたとすれば、このような可能性はない）。しかしながら本説話が靈異記によるものか、今昔によるものかを判別することは出来ない。そのいずれかによつて、また右に記したような理由によつて差違を生じたものと思われる。

(2) 讚岐国依女ノ事

これに類似の説話がやはり今昔（卷二十讚岐国女行冥途其魂還付他身語第十八）にある。宝物集の本説話も簡略化されているが、靈異記または今昔によつて簡略化したと考えて矛盾しない。一部、右の二説話集に見られない語句があるがそれは編者によつて敷衍し得るものである。主人公の名は「依名」とあり、これは靈異記の「衣女」の誤写と考えられる。^{注八}今昔には単に「女」とあるに過ぎない。従つて本説話は靈異記によるものと思われる。

(3) 魚八候八軸ニ変ズル事

これと類似の説話は、靈異記のほか今昔（卷十二魚化成法花経語第二十七）、三宝絵（卷中第十六話）、本朝法華驗記（卷上第十吉野山海部峰寺広恩法師）などにあり、いずれに比しても宝物集の本説話は簡略である。全文を引くと次の通りである。

法華經ノ持者ノ沙門。重病ヲ受テ余命且暮ヲ知ズ。醫師魚ヲ服スベシト教ヘケレバ。身命ヲ助ンガ為ニ弟子ヲ語ヒテ。名吉ト云魚ヲ八候買テ。密ニ坊中ヘ取入ントスルニ。他坊ノ僧侶等引合テ。是ヲアヤシミテ開テ見ントスルニ。弟子心憂思フテ。我師ノ年来持チ給フ法花經扶ケ給ヘト。心中ニ祈念シケルニ。此魚法花經八卷ニ変ジケリトナン。(大日本仏教全書による)

傍線を付した部分が、いずれによつたかを明らかにし得る部分と思われる。すなわち①の部分は、靈異記・今昔では自ら「魚ヲ食セム」(今昔)とするのに対し、三宝絵・法華驗記は「弟子」のすすめによる。宝物集は「医師」の教えとなつているが、他人のすすめによる点後者に近い。②の部分は靈異記・今昔にはないが、三宝絵には「心中ニ發願ス。我師ノ年来ヨミタテマツリ給法花一乗我ヲタスケ給ヘ。師ニ恥ミセ給ナ。ト念ズ」(東寺本)法華驗記には「心中發此念願。我師年来持法華經。此魚變經。隱大師恥」(続類從本)とあり、三宝絵・法華驗記の系列に近い。この両者のうちいずれかといえより三宝絵に近い。三宝絵と宝物集とが直接関係あることはすでに山田孝雄博士によつて指摘されていることであり、本説話の場合出典は三宝絵と考えるべきであろう。ただし先行する四説話集が魚の名を「鱈」または「鱈」と記しているのを、宝物集が「名吉」としたのは、あるいは靈異記訓釈の「鱈名吉」を参照した結果であるかも知れぬ。

次に全くの短文というべきものから、靈異記に関連ありと思われるものを拾うと、

(a) 卷四の「姪行ノ人品々アル事」の中に

天竺ニハ師子ノ妻ト成。震旦ニハ犬ニ契ヲ結ヒ。我朝ニハ狐ヲ妻ニシタルタメシアルメレバ……

とある。傍線部分は靈異記上巻「狐為妻令生子縁第二」を念頭において書かれたものではあるまいか。この説話は今昔にはない。

(b) 卷五「夫妻前生ノ願ニ依テ異形ノ交ノ事」に、

昔妻夫語ヒ。生々世々妻夫為ント契者有。妻ハ人ニ生レ。夫ハ蛇ニ生タリケルガ。妻池辺ヲ通りケルニ。此蛇マキ付テ嫁ケル事侍リケリ。

は、靈異記中巻「女人大蛇所婚頼薬力得全命縁第四十一」の前半または今昔卷二十四「嫁蛇女医師治語第九」に

よるものであろう。傍線部は、今昔の「前世ノ宿因」からきたものとも考えられるが、なお靈異記の「愛心深入。死別之時、恋於夫蛇、向父母。子而作是言。我死後世必復相也。其神識者、從業因縁、或生蛇馬牛犬鳥等、先由悪契、為蛇愛婚、或為怪畜生。愛欲非一」の一節によるのではなからうか。この推定にして誤りなければ、これも靈異記による説話と考えられる。^{注一〇}

(c) 卷七「伊賀国山田郡民ノ母畜生ヲ免ルル事」には、

伊賀国ノ山田郡ノ民ハ。母ノ牛ニ成ケルヲ。法華経ヲ供養シテ。畜生道ヲマヌカレサセタリキ。

とある。同類の説話は靈異記（中巻奉写法花経因供養顯母作女牛之因縁第十五）・三宝絵（卷中第十一話）・法華驗記（卷下第六伊賀国報恩善男）・今昔（卷十二伊賀国人母生牛来子家語第二十五）などに存し、宝物集がいづれによつたか判別することは、この程度の要約では困難である。

以上によつて、(2)および(a)は靈異記と直接関係あるかと思われ、(b)はその可能性あり、(3)は三宝絵によるかと考えられ、(1)は靈異記または今昔、(c)は四者のいづれか判別できない。(1)(3)(c)が、直接靈異記によらなかつたにせよ、これらがいづれも靈異記を源泉とするものであることはいうまでもない。^{注一一}

4 観音利益集（金沢文庫本）

古典文庫「中世神仏説話」所収の「観音利益集」中靈異記と関連のある説話は次の八説話である。（アラビア数字は便宜上付したものである）。

〔観音利益集〕

- (1) (三)延興寺恵勝 生牛預観音之利益
- (2) (同)豊前広国 為人写観音経出地獄事
- (3) (同)千手多羅尼

〔靈異記〕

- 上巻僧用涌湯之薪而与他作牛役之示奇表縁第二十
- 上巻非理奪他物為悪行受報示奇事縁第三十
- 下巻拍千憶持千手咒者以現得悪死報縁第十四

(4) 〔欠題〕

(5) 〔〇〕貧女預観音生事

(6) 〔〇〕穂積寺千手 貧女之利益

(7) 〔〇〕迷僧観音経

(8) 〔〇〕欠題

以下各説話について検討してみよう。

(1) 延興寺恵勝 生牛預観音之利益

この説話は、靈異記のほか今昔(卷二十延興寺僧恵勝依悪業受牛身語第二十)にも存する。宝物集の説話の場合と同様観音利益集の説話は概して短かい。本説話も靈異記・今昔所収のものより短かく、いづれかによつて要約したものと考えられる。靈異記・今昔間に相違する表現があり、しかもそれに相当する語句が観音利益集にあるものを示すと次のようである。(番号は便宜上付したものの)。

〔靈異記〕

① 无愁所駆

② 不能引車

③ 面姿奇貴、身体糲炒

④ 忽然不覲焉

〔今昔〕

(ナシ)

車引ク事コソ哀レナレ

形有様端正ニシテ只人ト不ニ思ヘニズ

播消ツ様ニ失ヌ

〔観音利益集〕

ヤスム時ナク、ネムコロナリ

車ヲ引コトアタハス

形チイトメツラカニ貴トク

忽然トシテ失ヌ

いづれの部分においても観音利益集は靈異記に近い。③の「形」、④の「失ヌ」が今昔と一致するからといって、この部分だけ今昔によつたと考えられない。また観音利益集の説話末にある「牛ニ生レテ車ヲ引テヤスム時ナクセメラレケルヲ、アハレママトテ本尊ノ観音来給タリケルナルヘシ」は、今昔の「観音ノ恵勝ガ牛ト成レル事ヲ人ニ令 知ムガ為ニ僧ノ形ト成テ示シ給フ也ケリ」とは、説話の解釈が相違している。これは靈異記説話

中巻贖蟹蝦命放生得現報縁第八および同巻贖蟹蝦命放生現報蟹所助縁第十二

中巻孤孀女憑敬観音銅像示奇表得現報縁第三十四

中巻極窮女憑敬千手観音像願福分以得大富縁第四十二

上巻悪人逼乞食僧而現得悪報縁第十五

上巻遭兵災信敬観音菩薩像得現報縁第十七

末の「観音所示」に両者ともよりながら、一方はこれを恵勝救済のために観音が靈験を示したと受けとり、他方はこれを観音が因果の応報を示したと解したことによるものと思われる。以上によつて、観音利益集の本説話は靈異記を出典とすると考えられる。^{注二一}

(2) 豊前広国 依為人写観音経出地獄事

観音利益集には右の題目のもとに二説話が収められている。その前半が広国蘇生説話であつて、後半は靈異記と関係ない。これも今昔(卷二十豊前国膳広国行冥途帰来語第十六)にある。観音利益集はかなり簡略化されており、内容、表現いずれの点においても、靈異記によつたか今昔によつたか判別し得ない。

(3) 千手多羅尼

観音利益集のこの説話は後半を欠いている。同類のものは三宝絵(卷中第八話)にある。ただしこの場合も靈異記、三宝絵のいずれによるか判別し得る手がかりがない。ただ最後の「タラニノレイトクアラハ威力ヲ顯スヘシト」の一句は、三宝絵の「モシ多羅尼マコトニシルシイマセハ。忽ニ其験ヲシメセト」よりは、靈異記の「実有驗徳、今示威力」に近く、いずれかといえば靈異記によるものとする方が穩当であろう。

(4) 欠題

題目を欠き、しかも説話の前半と最後の部分とを欠いているが明らかに蟹報恩譚である。この説話については、著聞集の項であげたように靈異記のほか法華験記(卷下百二十三話)にも収められており、更に靈異記(中卷第八話)によつたものが三宝絵(中卷第十三話)に、法華験記を翻訳したものが今昔(卷十六山城国女人依観音助遁蛇難語第十六)にそれぞれ収められている。靈異記所収の二説話及び三宝絵と、法華験記及び今昔との相違はいくつかあげることができるが、観音利益集の本説話に関連あるものに限れば、前者の系列では婚約した蛇がそのままの姿で娘のところにあられるのに対し、後者では人間の姿に変じて来訪し、娘の違約を知るや本形をあらわすのである。また前者では観音経の文句が記されていないのに対し、後者には「蛇蛇及蝮蝎氣毒烟火燃」とある。観音利益集はすべて後者に一致する。しからば法華験記、今昔のいずれを出典とするかといえれば法

華驗記であろう。観音利益集の「一尺ハカリノ御スカタニテ、観音御坐シテ」は明らかに法華驗記の「一尺計観音」によるもので、今昔の「端正美麗ノ蛇」によるとは考えられないからである。

(5) 貧女預観音利生事

貧しき女が観音信仰によつてよき夫を得て繁栄する有名な説話である。これもまた今昔（卷十六殖槻寺観音助貧女給語第八）に存し、類話といふべきものは古本説話集（卷下田舎人女子蒙観音利生事第五十四）にも見える。古本説話集所収のものは構成上かなり相違があるので除外している。靈異記・今昔両者の相違を一・二あげると、今昔では殖槻寺観音の靈驗譚であるに對し、靈異記では「殖槻寺之辺里」に住む女の親が作つた観音の靈驗譚である。また今昔にあつては女は一度郡司の子と縁組みをし、それに捨てられて後に良配を得るのであるが、靈異記では郡司の子の件がない。観音利益集には「殖槻寺」の語は見えないが、親の作つた観音の靈驗譚であり、また郡司の子とすることがない。更に観音利益集に見える「聖武天皇ノ御時」「三日マテトマリニケリ」「次日ハアメモ止ミヌレハ歸リニケリ」に相当する語句が、靈異記にはあるが今昔には見当らない。以上によつて本説話も出典は靈異記であるかと推定される。

(6) 穂積寺千手 貧女之利益

この説話も今昔（卷十六女人蒙穂積寺観音利益語第十）にある。しかし靈異記によるか今昔によるか判別し得ない。

(7) 迷僧観音経

これも今昔（卷二十古京人打乞食感現報語第二十五）に見えるが、次の二つの語句から靈異記によるものと考えられる。

〔靈異記〕

〔今昔〕

① 誦観音品初段

法花経ノ普問品ノ初ノ段

〔観音利益集〕

② 廻耶入正也

〔ナシ〕

観音経ヲ誦誦シケレハ、ワツカニ始ノ段ヲ読ムニ
邪ヲステテ正ニ入ケリ

①はいずれも同一のものを指してはいるが、表現上からいつて観音利益集が靈異記に近いこと明らかである。
 (8)欠題

題目なくしかも前半を欠くが、観音の助けにより本国に帰ることを得た話である。これまた今昔(卷十六伊予国越智直依観音助從震旦返事語第二)にも見られる。この説話の場合も靈異記、今昔のいずれによるか判別し難い。

以上によつて、(1)(5)(7)の三説話は靈異記によるもの。(3)もその可能性がある。(4)は法華験記によるもの。(2)(6)は靈異記、今昔いずれによるか判別し難い。しかし、私見によれば、それらもまた靈異記によるものではなからうか。一体、観音利益集には今昔と類似した説話が右のほかにかなり収められていることは事実であるが、それらが今昔によつたかどうかは疑わしい。何故ならその殆どが法華験記にも見える説話であつて、観音利益集の編者が資料としたのは今昔ではなくて法華験記ではないかと思われるからである。^{注一四}

以上の調査によつて日本靈異記は、宇治拾遺に直接の関連なく、著聞集にはごくわずかの部分に關係をもつのみで、著聞集編纂の資料としては殆ど用いられなかつたということ。これら所謂世俗的説話集に対し、宝物集(七巻本)、観音利益集などの仏教説話集には直接的なかわりのあることがほぼ明らかになつたと思ふ。もつともこれらの点については、現存文献による限りという但書きを必要とするであらう。

注一 狩谷掖斎「日本靈異記攷証」

注二 「扶桑略記」所収の智源撰「法華験記」葉恒撰「法華験記」の逸文は、重松明久氏の「往生伝の研究——平安時代の7往生伝について——」(名古屋大学文学部研究論集XⅢ史学8)に全部あげられている。もちろん本説話はその中に見当らない。

注三 日本古典文学大系「宇治拾遺物語」日本古典全書「宇治拾遺物語」などの頭注ですでに指摘されている。

注四 真鍋広濟氏によれば良観統編「地藏菩薩靈験記」の完成は天平四年以後のことである(古典文庫「地藏菩薩靈験記」解説)

注五 「地藏尊の世界」参照

注六 武田祐吉博士は「吉志大磨」としておられるが、通注に「校本「火」。底本、火とも読めるが、なほ「大」であろう」（日本古典全書「日本霊異記」）としておられる。なほ今昔は題目には「火磨」、本文には「火丸」とある。

注七 本説話の誤読例はすでに今昔に見られる。霊異記に「筑紫前守所点」とあるのを、今昔は「筑前ノ守□□ト云フ人ニ付テ」としている。「前守」は防人であり、今昔の頃にはそれと気づかぬまでに忘れ去られていたのであるうか。宝物集はただ「人ノ供」としている。

注八 この場合も宝物集編者の依拠したテキストが乱れていたとか、宝物集転写の間の誤であるとかいうことも考えられる。しかし人名が霊異記によるものであるという推定はそれによつて左右されないと思う。

注九 「三宝絵詞の研究」（「三宝絵略注」所収）参照

注一〇 (a)(b)ともに異類婚姻譚であり、一往民間伝承を採録したとも考えられる。しかしそれを仏教に結合したのは霊異記であり、宝物集はそれを受けついでるのである。単なる民間伝承の採録ではないと思う。

注一一 宝物集については諸本の調査を必要とするが、今は七巻本——それも仏教全書本——のみにとどめた。

注一二 近藤喜博博士によれば、観音利益集本文中所々「本ノママ」「ママ」と記してあるところから何らかの文献によつて書写したもの（古典文庫「中世神仏説話」解説）とのことである。とすれば金沢文庫本以前に同種の説話集のあつたことが想定される。しかしそれについては全く不明なのであつて、ここでは金沢文庫本を一転写本と考え、霊異記との関係を推定した。

注一三 古典文庫「中世神仏説話」解説参照

注一四 法華験記と観音利益集との関係については「本朝法華験記の影響」（仮題）の中において詳述する予定である。

翻刻書陵部蔵花園院御製 (光嚴院御集)

原 田 芳 起

序・凡例

書陵部蔵花園院御製一冊は、正しくは光嚴院御集である。続群書類従四二五巻に光嚴院御集として収めているのが正しい。列聖全集解題・皇室御撰解題等で、光嚴院の御集にあらずと断定して以来、その真実を見失われて来た。この百六十五首の御集を、花園院御集と誤認し、勅撰集等の花園院の御製を増補改編したものが、書陵部蔵花園院御集二四九首本(列聖全集底本)である。二四九首本が先に成つて一六五首本は略本であるとするのは、明らかに考証の誤であつた。詳細は、群書解題第十および、雑誌史学文学第三巻一号の拙稿を参照せられたい。

歴代御製集(国民精神文化研究所)を始め、種々の書に、光嚴院の御製を花園院のそれとして収めたり引例したりされて来た。きわめて個性的な光嚴院の作品・作風は見失われ、花園院の作風に対する批評も同時に混濁せざるを得なかつた。当然、すみやかにその正に帰らねばならない。

続類従本は、若干の脱字や、誤写もしくは誤植かと思われ

るところがある。書陵部本の方が本文の信頼性は大きい。ここに宮内庁書陵部の御許可を得て翻刻を試みるゆえんである。

皇室御撰解題以来、二四九首本の考証に終始したために、逆の結論に達したと思われる。この一六五首本に六首の光嚴院の風雅集所出歌があることを取上げるだけでも、推論は根本的に変つていたはずである。

帰結だけ摘要すると、この一六五首の集は、明らかに光嚴院の作品で、おそらく風雅集の撰集に先立つる短い時期の詠草で、その中から六首が風雅の選に入つた。あれこれの資料から集めたものでなくて、連続的に創作されたなまの詠草である。きわめて自由な詠みぶりや、全体の構成からもそれは察せられる。字余り句を好んで用いてあるが、その頻度がなみなみならぬものがある。稚拙をいとわぬ点もある。総じて若さがいちじるしく認められる。そのような点から、この詠草は、一つのまとまつた群として鑑賞することが適正な方法である。これも翻刻を試みる理由の一部である。

文字遣はすべて書陵部本のままとする。動詞を表記する漢字の送り仮名を欠くものなどはいささか不便だが、これが中世の文字遣であつたのであるからそのままとする。誤字と見られるところが数箇所あるが、これもそのままにし、他の本と対校することで補う。類従本と対校したところは、類従本が誤と見られるものも右側にルとして示す。書陵部蔵の二四九首の花園院御集に包含されるところは、同系らしいので、列聖全集御製集第三卷所収の本文によつて異文があれば示す。これはどちらかが文字の誤認による写しちがいがある場合がほとんどである。

異体の仮名や、漢字の字体は現行の普通の体に改める。

底本には、作品中風雅集所出歌の右肩に小さく風と注しているが、六首中三首だけそれがあるので、底本にあるものはゴチ体で風とし、残る三首は「」でかこんで風とする。

列聖全集御製集の略記はしとする。

濁点は底本にしたがつて付けない。

頭にアラビヤ数字で通し番号を付けたのは研究の便宜のためである。

花園院御製(光厳院御集ル)

春

霞

1 よもの梢かすむを見ればまたきより花の心そはや匂ひぬる

鶯

2 春をへていかなる声に鳴なればはつ鶯のいやめつらなる

梅

3 わかなかめなにゆつりて梅花さくらもまたてちらむとすらむ

柳

4 夕暮の春風ゆるみしたりそむる柳かすゑはうこくともし

春

5 春の日のとけき空はくれかたみいたつらにきく鶯の声

春雨

6 浅緑みしかき草の色ぬれてふるとしもなき庭の春雨

7 長閑なるむつきの今日の雨のをとに春の心そ深くなりぬる

8 花も見すとりをもきかぬ雨のうちのことよひの心何そ春なる

9 夕霞かすみまさとみるまゝに雨に成ゆく入あひのそら

10 何事をうれふとなしにのとかなる春のあま夜は物そ佗しき

花

11 散ことはやしと思ふを桜花ひらくる程のあやに久しき
12 軒ふかき花のかほりにかすまれてしらみもやらぬ宿の曙
13 くれかゝる花のほひをしたひかほにさらけにうつるふ夕

日影哉

夏

郭公

14 なれも又此夕暮を待けりな初ねうれしき山ほとゝきす
15 思ふ事ありあけの空の時鳥わか為とてやいまき鳴らむ

夏

16 夏山や木たち涼しき村雨のゆふへを時となくほとゝきす

夏昼

17 庭のうへのまさこにみちてゝれる日のかけみるなへにあ
つやまされるりよん

夏夕

18 蚊遣火のけふりまさると見程にくれぬるならし入あひの
声

夏夜

19 秋の夜をさひしきものと何か思ふ水鶏こゑするよひの月
影

夏月

20 更る夜の庭のまさこは月しろし木蔭のゝきに水鶏声して

照付

21 ともしするほくしの松のつきもあへす葉山か峯は雲明ぬ
也

夕立

22 吹すくる梢の風のひとほらひこえまで涼しよその夕立

遠近夕立

23 とをつそらにゆふたつ雲を見なへにはや此里も風きほふ
也

螢

24 とふ螢ともし火のこともゆれとも光をみれば涼しくもあ
るか

秋

初秋

25 花もまたき草の籬のあさはらけ露のけしきに秋は来にけ
り

にけり

26 世の色のおはれはふかく成行よ秋はいくかもうまたあら
なくに

27 夕日さす梢の色に秋見えてそとの森にひくらしの声

28 秋はまたあさけの庭の池の面にはやすさまき水の色哉

29 秋になるねさめそいとゝうれはしき物おもふ身にはあり
もあらずも

30 いとはやも風すさましみそれとなき虫も籬にやゝ鳴たちぬ
時わかぬ竹のさ枝に吹風のをとしも秋に成にけるかな

七夕

32 目にちかき面影ながら年もへぬ雲井の庭の星合の秋
33 おほかたの秋てふ秋のなかりき夜をこよひともかな星合の

空

萩

34 身こそあらめ花は昔をわするなよ馴し戸くちの庭の秋萩

萩

35 秋風の、き葉の萩よなにそこのうれへのたねを植置にける

薄

36 ほにいて、我のみまねく糸薄くる人あれなふるさとのあき

秋

37 秋風によはき尾花はうこけとも月にのとけみふけすめる夜半

秋夕

38 物ごとくに我をいたむるゆへはあらし心なりけり秋のゆふ暮

39 しつむ日のよはき光はかへにきえて庭すさまじき秋風の暮

菊

40 咲やうてしはしもあれな庭の菊待へき花の又もあらなくに

虫

41 夜をさむみいねすてあれは月影のくたれるかへにきり

月

42 くる、空に待つるまゝのなかめよりすたれをろさぬ月のすから

43 てらすらん千里の人の秋の思ひ月にやうつす影のかなしき

冬

時雨

44 木の葉ぬれてそゝくともなき村時雨さすや夕日のかけもさなから

落葉

45 木葉こそもろくもならめ夕嵐我なみたさへたえすも有哉

冬

46 さむからし民のわらやを思ふにはふすまのうちの我もはつかし

47 よはさむみ嵐の音はせぬにしもかくてや雪のふらんとすらん

48 雪はまたきた、冬枯の草の色の面かはりせぬ庭そさひしき

49 冬をあさみまたこほらねと風さえてさ、波寒き池の面哉

- 50 散まよふ木葉にもろき音よりも枯木吹とをす風そさひし
まかふる
- 51 霜にとほる鐘のひゞきを聞なへにねさめの枕さえまさる
也
- 52 霜のをくねくら梢さむからしそともの森に夜からすの鳴
雲こほる木すゑの空の夕附よ嵐にみかく影もさむけし
- 53 空はしもくもるとは見えぬ朝明のしもにうすきる世の気
ナシレ
色哉
- 54 この夜半やふげやしぬらん霜ふかき鐘のをとして床さえ
みねル
まさる
- 55 冬枯の草木の時をあはれとやはなをあまねくふれる白雪
- 56 それと見えし霜のくち葉も猶落てふる枝はかりの庭のは
き原
冬暁
- 57 あかしかぬる時雨のねやのいくねさめさすかに鐘の声も
それ
きこゆる
- 58 かけうすき有明の月に鳴鳥の声さへしつむ霜のをち方
霜にくもるありあけかたの月影にとをちの鐘もこゑしつ
む也
- 59 冬曙
- 60 ひゞき残るとをちの鐘はかすかにて霜にうすきる曙のそ
ら
冬朝
- 61 おきてみねど霜ふかゝらし人のこゑのさむしてふきく
ナシレ
も寒き朝明
- 62 夜もすから雪やおもふ風の音に霜たにふらぬ今朝のさ
むけさ
冬夕
- 63 嵐吹あられこほるゝけふの暮雪の心やちかつきぬらし
霜かれのをはななか庭に風ふれてさむき夕日はかけさえぬ
シレ
なり
冬夜
- 64 星きよき木すゑの嵐雲晴て軒のみ白きうす雪の夜半
冬月
- 65 空のうみ雲の波もやこほらん夜わたる月の影のさむけ
き
霰
- 66 さえくらすあらしに雪やちかゝらしさきたつ霰軒ををつ
なり
雪
- 67 雲のゆふへ嵐のこよひふりそめぬ明なは雪のいくへかも
見む
- 68 雲のゆふへ嵐のこよひふりそめぬ明なは雪のいくへかも
見む

70 野山みえル皆草木もわかす花のさくゆきこそ冬のかさり成けれ
朝日さす松のうれよりをつる雪にきえかたにしもつもる
木のもと

暁雪

72 ふりうつむ雪の野山は夜ふかきにあくるかどりのとを里
の声

曙雪

73 目にちかき軒のうへよりしらみそめて木すゑかほれる雪
の曙

朝雪

74 うつりにほふ雪の梢の朝日影今こそ花の春はおほゆれ

風前雪

75 吹みたしはらひもあへぬ竹の葉の風のうへにつもるしら
ゆき

夜雪

76 軒の上はうす雪しろしふりはるゝ空には星のかけきよく
して

雨後雪

77 けさの雨のなこりの雲やこほるらんくれゆく空の雪に成
ぬる

山雪雲ル

78 岩も木もすかたはさすか見えなからをのか色なき雪の深

山へ

野雪

79 なかめやるかきりも見えずかすみゆく野原か末は雪とし
もなし

浦雪

80 浪の上はあまきる雪にかきくれて松のみしろき浦の遠方

杜雪

81 雪にたにつれなくてやは山城のとき葉の森も色かはる也

山家雪

82 人はとはぬみやまの庵にあはれ猶ところもわかすふれる

白雪

田家雪

83 すゑとをきかり田のおもの雪の中にたてるや庵の見もさ
ひしき

閑居雪

84 軒の松にかよふ嵐の音たにもたえていくかの雪のふるさ
と

社頭雪

85 たのむゆへのふかき心はへたてぬをいつかみかさの山の
しら雪

松雪

86 ときは木のその色となき雪の中も松はまつなるすかたそ

みゆる

雪中鳥

87 降つもる雪の梢にゐる鳥の羽かせもをしき庭の有明

あさあけレレ

雪中獣

88 起いてぬねやなからさく犬のこゑのゆきにおほゆる雪の

あさあけ

雪中懐旧

89 むかしをほうつみや残す白雪のふりにし世のみうかふお

もかけ

雪中述懐

90 いたつらにふる白雪をあつめもたぬわか光なみ世さへく

もれる

炭竈

91 立のほるけふりの末をあはれともたれかはとはむをのゝ

炭竈

除夜

92 年くると世はいそきたつ今夜しものとかにものゝあはれ

なる哉

恋

初恋

93 しらさりしなかめやなにそよしなしに物おもふ身にはな

らしと思ふを

忍恋

94 人まなみたゝにはいはぬその色を見しらぬにして過ん

とやする

不逢恋

95 我はおもひ人にはしるていとはるゝこれを此世のちきり

なれとや

待恋

96 あすのうさも我心からかなしきにこよひよ今夜とへやと

そおもふ

互忍待恋

97 待もとふもつゝむにふくる時のまよあちなからぬ一夜

ともかな

別恋

98 これ程も又はいつかの別路をくれよのちよのやすのたの

めや

偽恋

99 いまそおもふたのみしうちいくちはれかさるかうへの

なさげ也ける

誓恋

100 うきかうへになくそ猶もあはれなるちかひし末を人の

為とて

- 108 恋獣
思ひつくす思ひのゆくゑつくくと涙にソレおつる燈のかけ
- 107 恋
思ひつくしあはれに物のなりたちてすへて涙のおちもとナシル
まらぬ
- 106 恋恨
あさくしもなくさむる哉と聞からにうらみの庭ぞ猶ルふか
くなる
- 105 恋契
うしとすつる身をおもふにも更に猶あはれなりける人のレ
契りよ
- 104 恋契
こひあまり我なく涙雨とふるやこのくれしもの雲とつる
空
- 103 恋涙
我やたそあやしやつるにたえはてはあらしと思ナシルふをけふ
まての身よ
- 102 絶恋
うきにたえすうらむれは又人も恨ちきりのはてよたゝか
くしこそ
- 101 恨恋
をしや我もあはれかなしのいくふしをひとつうらみのう
ちになしぬる
- 116 寄雨恋
いもかうへにおもひうらふれねすてあかす此夜すからの
雨の音はも
- 115 寄風恋
なにそこのうはの空より吹風の身にあたるさへ物のかな
しき
- 114 寄夕恋
にしの山にくたる夕日の影みればけふはたくれぬ妹をみ
なくに
- 113 寄朝恋
如何になるけさのなかめそこよひ我みるとしもなきゆめ
のなこりに
- 112 寄曉恋
今も此有明のそらに鳥はなけとわかれし人にまたあはぬ
哉
- 111 寄冬恋
とちつもる氷も雪も冬のみをとけむこもなき我思ひ哉
- 110 寄春恋
いろねにもうれへのすゝむたねとして我に物うき花鳥の
春こそ
- 109 里の犬のこゑをきくにも人しれすつゝみし道のよはそ恋
しき

- 117 寄霜恋
あさ霜のむすひもはてぬ契ゆへさてこそけなめ知人をな
み
- 118 寄煙恋
我恋よけふりもせめてたちなゝんなひかぬまでも君に見
ゆへく（欠字）
- 119 寄山恋
あはれ今はかくて契やつくは山しけきうらみの我もそふ
比
- 120 寄松恋
人やうきさもいはしろのむすひ松むすはぬ世々の身の契
りこそ
- 121 寄庭恋
妹待と時そともなきなかめして蓬か庭も霜かれにけり
寄苔恋
（欠字）
- 122 寄鶏恋
そのまゝにはらはぬ庭の苔の色にたえにし人の跡も見え
けり
- 123 寄鳥恋
わかれましつらからましと聞もつらし八こそゑの鳥の明方
のこそ
- 124 寄鳥恋
月に鳴やもめからすは我ごとく独ねかたみつまやこひし
- 125 寄犬恋
人しれすわかちすまむ宿のあたりとかむる犬もせめて
なつかし
（またレ）
- 126 寄人恋
思ひとりしその偽のならひゆへ人にもひとの猶たのまれ
ぬ
- 127 寄夢恋
ゆきてかよふ夢てふものゝあるならばこよひの心見えさ
らめやも
- 128 寄心恋
うきはさそなあはれなるさへくるしきよ人に心のなへて
ならぬ
（にル）のレ
- 129 寄言恋
人を思ふ世にふりさらむことのはの君にはしめていはま
ほしきを
- 130 寄鏡恋
思ふ色のいはれぬきはをうつしみせむかゝみもかなや君
か心に
- 131 寄衣恋
こひしとてかへさむとはたおもほえずかさねしまゝの夜
の衣を

寄燈恋

のル右傍

132 さそやけにわれそつれなき待よはる明方の窓にきゆる燈

寄書恋

133 見しそかしかゝることの葉そのふしとさらに涙もふるき

玉つぎ

恋

134 恋といふ名のみはなへてふりぬめり我思ひをはいかゝい

はまし

ナソル

135 恋しきはしのひかたきをいかゝせんうきは身をしるなく

さめもあり

雑

暁

136 雲の色星のひかりも同じ空の長閑になるやあかつきにな

る

竹

137 もゝしきや庭に見馴し呉竹のみしかきよこそ猶あはれな

れ

河

138 よとみしも又立かへりいすゝ川なかれの末は神のまに

風

橋

139 とまる名はなからの橋のはしくゝら朽てのちしも猶残り

ける

旅

140 たひにして妹を恋しみななめをれば都の方に雲たなひけ

り

雑

141 さ夜ふくる窓の燈つくゝとかけもしつけし我もしつけ

し

142 心とよもにうつるよ何そこれたゝ此むかふともし火の

かけ

143 むかひなす心に物やあはれなるあはれにもあらし燈のか

け

144 ふくる夜の燈のかけををのつから物のあはれにむかひな

しぬる

145 過にし世いまゆくさきと思うつる心よいつらともし火の

本

146 ともし火に我もむかはす燈もわれにむかはすをのかまに

く

雑暁

147 かねのをとに夢はさめぬる後にしもさらに久しき暁の床

【風】

雑夕

148 鳥かへるそどもの森のかけくれてゆふへの空は雲そのと

けき

- 149 山家
聞侘ぬ枕の山の夜のあらし世のうきよりは住よけれとも
150 軒につくく檜原か山に雲をりてくるく木す糸に雨をちそ
めぬ
151 田家
伏見山かと田の末は明やらて松のこなたの空そしらめる
懐旧
152 しソルのふへきむかしはさりな何となく過にし事のなそあは
れなる
述懐
153 たしきをうけつたふへき跡にしようたてもまよふ敷島
の道
154 舟もなく筏もみえぬおほ川にわれわたりえぬ道そくるし
き
夢
155 花のうちにあそふこてふのもく年ニルよさむるうつは猶や
みしかき
竹
156 風になひく竹のむらくく末見えて夕日にはるく遠の山本
山
157 山松の梢をわたる夕嵐軒の檜原に声をちぬ也
あつき
158 庭の日は木陰も見えずてりみちて風さへぬるみ暮かたき

- 159 比
はかなき
我もさそあすともなしのけふの世にあればあるてふさく
かに糸ルの露
おもしろき
160 声
時にふるくなきけのうちも心すむは月にしらむる糸竹の
物名
紅葉のか
のレ
161 をりみたれよもの山へに雲もみち野風はけしみ雨になる
暮
ほたる
162 【風】
ふりうつむ雪に日数はすきのいはたるひそしけき山陰の
軒
藤はかま
163 ふるさとやちくさか庭の花の秋かきねの露に松虫の声
たけかは
164 ことし又ははかなく過ぎて秋もたけかはる草木の色もすさ
まし
やとり木
165 月影はまたなかに空にのとけきをはやとりきこゆあけぬこ
のよは

伊東静雄について

岩 田 久 美 子

孤高な高踏的詩人と自らを批評しつつ独自の詩的世界を確立した伊東静雄は、近代詩壇に大きな一つの指針を残して昭和二十八年その詩的生涯を閉じた。四冊の詩集「わがひとと与ふる哀歌」、「夏花」、「春のいそぎ」、「反響」に彼の心を托して。

伊東静雄は処女詩集「わがひとと与ふる哀歌」以来、彼独自の高潔な詩風で当時の詩壇に注目された。「彼の詩を支えたものは、決して言葉ではなく、つねに独自の強烈な精神であつた。」（『伊東静集詩集』創元社・解説桑原武夫）という言葉は、伊東静雄の詩の特色のすべてを語っている。

私が初めて彼の詩に親しみ、接した時、その息苦しい、救いのない孤独感に言い知れぬものを感じた。それは我々人間が生を受けた瞬間から背負わなければならぬ宿命故であるうか。何ゆえ、彼はかくも息苦しく表現しなければならなかつたのか。その実体を確かめるため、彼の詩風に触れ、彼の詩人としての背景に照明をあて、生活環境や時代環境が作品に与えた影響を探ると共に、彼の性格判断に必要な書簡・日

記を通して内面的世界の正直な吹き目を向け、繊細で傷つき易い一詩人の苦悩にスポットをあてて、彼の人間像を描いてみたい。

伊東は、その詩人的出発期において一人の女性とその家族（酒井家——彼が佐賀高等学校在学中に、英文学を教授していた酒井小太郎氏が彼と同郷の諫早出身であつたため、彼が京都大学在学中には姫路にいた小太郎氏の家を度々訪問し、令嬢の安代、百合子さんと親しくなる）を識り、彼らとの接触により、日頃沈み勝ちな伊東の心は癒されていつた。自分の境遇のみじめさに悲觀的状态だつたが、酒井家の雰囲気「生活のオアシス」（大正十五年九月八日、酒井安代、百合子宛書簡）を感じ、ひとときの憩いの時間をもつた。そして、小太郎氏の令嬢百合子さんに彼の若い魂は魅せられる。しかし、この愛の芽は伸びないで切りとられ、それ故、彼自身の内に沈めた苦しいものになつた。唯一つの恋は告白という形をとることなく、彼の深部にとどまつた。

こんな風に、自分で自分の手足をちぢめて、からんでう

もこもる様に、ひつこんであるのを腑甲斐ないとも思ひますけれど、どうにも仕方ありません。もうしばらくしたら、私も、もつと、はつきりした男になれるだらうと思つて、それを待つてゐます。(大正十五年五月・酒井安代宛書簡)

この手紙からは、愛を打ち明けられず低迷している姿がうかがわれる。この頃の彼は、しきりに淋しいと友人に洩らしている。そして親しい友人には百合子さんへの思慕ゆえの悩みを偽りなく伝えていたのではないかと思う。その証拠として、

帰つてからまだ京都にはゆきません。ゆり子さんもいや。(昭和四年八月二十九日・宮本新治宛書簡)

京都の娘さんは相愛らず。人生のなんとわずらわしきかなですな。(昭和五年三月二日・宮本新治宛書簡)

というように、この手紙からは簡単な言葉の裏に秘められている彼のやりきれない悲痛な、救いようのない声を聞くのである。処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」が「残忍な恋愛詩」(「コキト」昭和十一年一月号所載「わがひとに与ふる哀歌」萩原朔太郎)だといわれる理由は、百合子さんへの悲痛な想いに、その根本的動機はある。

冷めたい場所

私が愛し

そのため私につらいひとに

太陽が幸福にする

未知の野の彼方を信ぜしめよ

そして

真白い花を私の憩ひに咲かしめよ

昔のひとの堪へ難く

望郷の歌であゆみすぎた

荒々しい冷めたいこの岩石の

場所にこそ

これは残酷な愛の詩である。なぜならこの詩からは限りない恋の陶醉は匂つてこず、恋に泣く悲しみも伝わつてこない。ただあるのは悲痛さのみが鮮烈に響いてきて、切迫した青年の魂が、いつも冷たい孤独の場所で考えている姿だけである。「荒々しい冷めたい岩石」の厳しい条件下におかれてもなお「真白い花を咲かしめよ」と叫んでいる彼の純粋な思慕に青年の清純な姿がみられる。伊東の詩は心の状態を素直に発散させるのではなく、心の状態は一瞬の精神的時間を通して初めて登場する、余裕のある発想法である。

自分は何か風景なり絵画なりに感動する、実に美しいと思ふ。すると、これはどうして美しいのか、またはどうして美しいと感動するのかと自分を探る。するときつと

それが判る。それを書くんです。〔コギト〕昭和十年

一月号所載「感想」中島栄次郎)

とそのような意味のことを伊東静雄が洩らしたと中島栄次郎は書いているが、この言葉に彼の詩精神の特色がみられる。

自然の姿そのものに歌う価値を見出さないで、自然の姿を彼の心のなかで濾過し、その中に魂を投入することによって激しく詩作する。彼は、虚飾のない直情的表現を信条とする抒情詩を拒絶することによって、新しい抒情詩を創出した。ここに伊東の詩の特色があり、価値がある。また、彼の詩には逆説的肯定の方法が好んでつかわれている。

伊東の内発的な発想は、それを阻止し圧殺しようとする否定面を、意識的に逆用することによって、かえってその強烈さを印象づけるのに役立たせた。(『日本浪漫派の運動』三枝康高著・現代社)

と述べられているように、逆説的抒情の方法は、壮烈なる意志の決断を表わすレトリックとして使用されている。それが、伊東の詩には我々の魂の深部に浸透してくる切迫した何かがある。こういう方法は失敗すると観念的になるおそれもあるが、彼の場合は、独自の強烈な思想が全体を支え、その作品をまとめ上げているといえよう。

処女詩集において早くも孤独なものさびしい詩を作った彼は、

実生活の上では、非常に危険な時期であつたような気が

する。詩と同じ程度に、いつもその頃は故知らず激して、家の中に居ても、並外れた言動をしていた。

(『コギト』昭和十五年五月号所載「夏花」)

と當時を述懐しているが「並外れた言動」の中に彼のやりきれない感情が汲みとられる。当時の社会情勢は暗く、繊細な一詩人には時代の懷疑と不安に悩まされつつ、なお生きなければならぬという絶望感が襲つた。そして、常に孤独を意識した。

こんなに孤独でゐますと、周囲のことも皆単純にみえて熱中する気もおこらず、それが又、私を孤独にするのでありませう。(昭和六年十一月十六日・酒井ゆり子宛書簡)

彼は自分を孤獨的人物に設定している故、彼の孤独には救いのない、絶望感がある。孤獨的ムードではなく、宿命的孤独である。それは「太陽が孤独であるような、そんな孤独」(『文芸文化』昭和十五年六月号所載「伊東さんの詩」池田勉)であり、生が続く限り、永遠に継続する孤独である。

訴えるような詩が次々と織りだされ、処女詩集の後五年間の空白があつて第二詩集『夏花』が、さらに三年の後『春のいそぎ』が刊行された。

覚悟が激しくなると、さうさう安易に物書くことが出来にくくなります。(昭和十一年十二月・酒井ゆり子宛書簡)

詩はこの頃あまり書けません。段々むずかしいことがわかつて来て閉口するのです。(昭和十二年十二月二日・酒井ゆり子宛書簡)

処女詩集『わがひとに与ふる哀歌』で詩壇の注目を浴びた彼は、その後「覚悟」して詩作しようと思心したが、悩みも多かつた。

自分の詩の発想法はゆきづまっていた。いや、ゆきづまっていたといふより、ゆきづまっていたところからやつとしてばり出されるやうな詩である。(昭和十四年九月一日・日記)

と述べているように、この頃から発想法は行きづまり、以前のような魂の鮮烈な詩風はだんだん影をうすくしつつあつた。この頃の彼は、

近頃は私は半歳の疲労が一時に出て、まるで阿呆のやうな頭になつてゐます。(昭和十一年八月二日・酒井百合子宛書簡) 近頃生活感情が切実になればなるほど詩のかけないやうになりますのはいかがなわけですか。(昭和十一年三月十三日・富士正晴宛書簡)

といつてゐるように、元来あまり健康に恵まれていないことに加えて、家庭内の事情や、精神状態の不均衡から詩作することすら拒絶したく思つてゐた。彼には何よりも精神の疲労を回復させることが先決問題であつた。今ここで彼の心の吹きである日記に眼を向けてみよう。

ドイツとポーランド国境にて激戦中との号外あり、自分の頭脳では果して戦争に堪へるだらうか、二、三日前から自分はしきりにそれをあやぶんでいる。

頭重く、いんうつ也、夏の疲労つもつて甚しい感がする。朝校庭で分列式ながめながら、思索ばかりで行動なきものは発狂す、といふ言葉をつぶやいてゐた。この疲労はどうにかしなければいかん。(昭和十四年九月一日)

第二次大戦触発の危機を感じとり、「思索ばかりで行動なきものは発狂す」という詩人にとつては致命的時代を忍耐深く生き続けねばならなかつた。時代の不安が与える痕跡は肉体の深部までを貪り、遂には「身体の疲労は堪へられぬ」(昭和十四年九月二日・日記)という最悪の事態に陥つた。しかし、彼は迫りくる世界動乱の靴音に発狂の不安を如実に感じとつていたからこそ、その発作の勃発を避けるため詩を書いた。そして表面は穏やかで、発想法も以前に比べて平明になるが、それだけに潜んだ痛ましさを感じる詩が作られた。それは緊迫した戦局下にあつて、傷つき易く、精神的苦痛に耐えかねてゐた彼の心が鎮静な平明な詩風へと変化していつたということであらう。

このように乱代を泳ぎ抜く努力は怠らなかつた彼ではあつたが、

各自の苦しみを我慢して公の仕事をして行く、人間のい

とほしさをしみじみと感じるのです。(昭和十五年六月
中旬・池田勉宛書簡)

といつてゐる姿に生を意識している人間の救いのない叫び声
が聞えてくるようである。常に孤独に悩まされていた彼は家
庭内のことにも時には悩まされた。「私は目下家の中にそれ
はそれはいやなことがあり心身げつそりしてあます」(昭和
十五年六月二十一日・小高根二郎宛書簡)「家庭はいやだ。
しかし家庭を離れてひとりで生される自信も又ない。」(昭
和十四年九月一日・日記)この書簡、日記から、安息の場も
なく、精神が放浪し、言い知れぬ苦悩が伝わってくる。そし
て遂に、

一語一語は重く、光つてあて、全体はさらりと淡白な、
そんな文章書いてみたい。(昭和十八年九月二十一日・

日記)

という切実な言葉が彼の口から出ている。

昭和二十年、第二次世界大戦が日本の惨敗に終り、友人を
失つた彼は、すでに身も心もぐにやぐにやになつてしまつて
いて詩作する心の余裕もなかつた。しかし田舎に一軒家を見
つけて住みついた彼は、少しは心の余裕も出来、第四詩集
『反響』が刊行された。

夏の終り

夜来の颱風にひとりはぐれた白い雲が

気のとほくなるほど澄みに澄んだ
かくはしい大氣の空をながれてゆく

太陽の燃えかがやく野の景観に
それがおほきく落す静かな翳は

……さよなら……さやうなら……
……さよなら……さやうなら……

いちいちさう領く眼差のやうに
一筋ひかる街道をよこぎり

あざやかな暗緑の水田の面を移り
ちひさく動く行人をおひ越して

しづかにしづかに村落の屋根屋根や
樹上にかげり

……さよなら……さやうなら……
……さよなら……さやうなら……

ずつとこの会釈をつづけながら
やがて優しくわが視野から遠ざかる

この詩からは以前のような息苦しい姿は消され、詩人の静
かな感慨を感じる。しかし、静かな中にもやるせない心情が
伝わってくるのは、激しく深い思想のためである。そこ
に、私は何か痛々しいものを感じる。『反響』刊行後、次の
ような書簡を伊東は友人に送つてゐる。

私は最近の自分の作を、初期のもの「解説」といふ風
に考へてをります。しかし昔に帰ることは、到底無理な

やうに思はれます。あの頃のやうな、意識の暗黒部との必死な格闘は、すっかり炎を消して平明な思索に移らうとしてゐるやうに自分では考へてをります。(昭和二十三年二月十三日・桑原武夫宛書簡)

初期の激しい、身ぐるみの発想から平明な思索へと転化していつた彼の詩からは、表面の穏やかさとは相反する強い生への哀感みtainなものを感ずる。彼は日頃、

発想は熱く烈しくなければなりません。彼が表現に於ては沈着暢達でなければいけないと思ひます。そのためには深く思つて浅く出す心組が必要かと存じます。(昭和十九年三月二十二日・田中光子宛書簡)

と力説していたが、この頃(「反響」)の作品は彼のいう「発想は熱く烈しく」、表現方法は「沈着暢達」の方向へと変化していつた。

以上、伊東静雄の作品や思想について触れてきたが、いま私が思うに、彼の詩的生涯は決して恵まれていたとはいえない。常に太陽が孤独であるような孤独を感じ、それ故彼は歌わなければならなかつた。彼の宿命的な孤独があの息苦しい訴えと化し、それはデビュー当時から詩の中心となり、その生命であつた。

伊東の初期の作品は若々しく、その感情を表わす方法として逆説的肯定の抒情が使用されていたが、晩年に近づくにつれて、激しい発想よりも平明な思索の方法をとり、第四詩集

「反響」所収の「詩作の後」「路上」などを「円熟の頂点を示すもの」とする江頭彦造氏のごとき評者もあるが(三省堂刊『鑑賞と研究現代日本文学講座』参照)。私にはむしろ初期の作品にみられる傷つきながら生きていく青春性に彼の詩の価値があるように思う。彼の発想法は変化していつたが、彼の詩的態度は一貫して息苦しい表現方法をとつている。彼が詩作する上には、それ以外に方法がなかつたのである。時代が与える不安と懷疑に怯えながらも、自らと戦い、その中で詩作しようとした彼の力強い魂が息苦しい表現へとかりたてたのである。それ故、彼の詩は暗黒の憂愁に充ち、そこには救いのない孤独感が漂つている。何か永遠の迷いを感じるような彼の詩である。事実、彼は一生休らうことなき魂を持ち続けて、その生涯を閉じたといえよう。

執筆者紹介

安田章生	本学教授
山根賢吉	本学講師
原田芳起	本学教授
岩田久美子	本学昭和三十九年 卒業生

学 報

(昭和三十八年九月より昭和三十九年八月まで)

○十月十九日 国文学会総会開催。

(三十八年度) 卒業生も参加し

て、盛会であつた。

講演 文芸雑感 梁 雅子氏

パリ印象 岩田英子氏

シンポジウム

学生生活を語る 在学生

○十月二十五・六日 文化祭。国文

科三回生が、演劇「笑う赤猪子」

(有吉佐和子作) に出演。二回生

は古書展を開いた。

○秋の文学散歩。十月三十一日国文

科生約百名が、伊賀上野の芭蕉の

遺跡をめぐる。安田・竹内教授

・安田講師・吉田助手参加。

○十二月十日 四回生卒業論文を提

出。

○二月二十日 「樟蔭国文学」第一

号発行。

○一月三十日 卒業論文発表会。四

回生は各自の論文題目の選択・内

容概要・感想等を発表した。三回

生・二回生の有志も参加。

○二月十五日 予饗会。第六教室に

おいて、三回生・二回生が卒業生

のために行なつた。

○修学院離宮拝観。二月二十四・五

の両日、四回生有志は二班に分か

れて拝観。折りからの雪景色は格

別であつた。

○三月十八日 昭和三十八年度卒業

式挙行。京谷美枝子ほか四十五名

が卒業。十九日にレストランパレ

スで謝恩会が催された。

○安田章生教授は四月九日、大阪大

学より文学博士の学位を受けられ

た。論文は「藤原定家の研究」

○四月二十一日 歓迎会。国文科に

新しく入つた二回生五十三名の歓

迎会を行なつた。

○春の文学散歩。五月十三日、三・

四回生が万葉史跡飛鳥めぐりを行

なつた。安田青風講師の臨地指導

があつた。研究室からは竹内・吉

田が参加。

五月二十二日二・四回生が安田

章生教授・吉田助手と二上山に登

山し、大津皇子の陵に詣でた。

○教育実習。六月八日より二十日ま

で。四回生のうち教職過程を修める四十八名が、樟蔭学園高校と、同中学に分かれて実習。

○国文学会評議員会。六月十一日に国文研究室において。秋の総会、会報のことにつき協議を行なつた。

○原田芳起教授。昨秋より病氣静養のところ全快され、六月より出講

○夏期公開講座。七月十三日より二十日まで。国文学関係は、七月十三日、安田章生教授の「日本芸術と女性」の講演があつた。

伊賀上野を訪ねて

芭蕉忌二百七十年記念の「芭蕉の生涯展」を見て、芭蕉のいろいろの作品に接した興奮のまださめぬ折りしも、国文科の文学遠足が、芭蕉翁

生誕の地、伊賀上野ときまつて私たちは大喜びだつた。

十月三十一日バスで伊賀上野へ向かつた。秋も深い車窓からの眺めは素晴らしく、美しい紅葉や芒が原に目を配つた。揺られること四時間で伊賀盆地に到着。その中の静かな町が芭蕉の故郷であつた。

まずモダンな近代建築の芭蕉翁記念館を訪ねた。閑静なところにこんな立派な家を建てて、書物や作品等を大切に保存してもらふことは、石ころ程の値うちしかない凡人の私には、非常に羨ましいことに思えた。人生は短く芸術は長し、ということを強く感じた。

次に伊賀上野城趾に立つて伊賀盆地を眺めた。芭蕉の旅姿を模して建てられたという風変わりな佛聖殿を見て、城下町らしい佛が残っている古い町並みを歩いて釣月軒へ廻つた。

芭蕉の生家のこの小さな離れ屋で処女作「貝おほひ」は書かれた。畳も

古ぼけ、天井にはくもの巣がはり気味悪く、うす暗いところだつた。彼は文机の前に座つたままで月を眺めたのかも知れないと思つた。翁の遺髪を納めた故郷塚から、最後に虻虫庵を訪ねた。「みの虫の音を聞きに

来よ草の庵」の句から名づけられたという。翁の高弟、服部土芳の棲家であつた。古い椎の木などあり、庭も苔むしていかにも草庵らしい趣きがあつた。木蔭に土芳の墓石があり、終の白い花が清香を放つて降りこぼれていた。有名な三冊子もこの庵で書かれたのだそう。

秋の日暮れは早く、たそがれの冷たい風にあわてて、大揺れのバスで一路大阪へ楽しい一日旅行を終えた。(三回生 椎葉アヤノ)

昭和三十九年度講義題目

国語学概論 島田 勇雄講師
国語学史概説 鈴木 一男講師

国語法概論	竹内美千代教授	話しことば	泉田 行夫講師	島崎藤村「破戒」論	小川 寿子
国語表現論	竹内美千代教授	文学概論	黒田 正利講師	夏目漱石研究―「道草」について―	岡田三都子
国文学概論	安田 章生教授	言語学概論	蛭沼 寿雄講師	石川啄木「悲しき玩具」研究	
国文学史概説	細川 馨教授	美術史	今井 啓一教授	伊勢物語の愛の諸相	加藤 英子
国文学講読		漢文学	今井 啓二教授	方丈記研究	加藤 佑子
万葉集	安田喜一郎講師	中国哲学史	内野熊一郎兼任教授	紫上の発心	加納 久子
大和物語	原田 芳起教授	書道	炭山 南木教授	近松論	海堀 文江
蜻蛉日記	原田 芳起教授	日本史	今井 啓一教授	柿本人麿論	喜家村順子
和泉式部日記	竹内美千代教授	有職故実	大丸 弘講師	徒然草研究―その矛盾の問題をめぐって―	北尾 圭子
源氏物語	久保 重教授			谷崎潤一郎論―「細雪」を中心にして―	京谷美枝子
今昔物語	山根 賢吉講師			井原西鶴論	工藤 富子
徒然草	安田 章生教授			竹取物語	後藤 武子
俳諧七部集	木村三四吾講師			堀辰雄論	佐藤 洋栄
国文学研究				泉鏡花論	讚岐 浩子
中世歌人論	安田 章生教授	立原道造研究	天野 節子	中島敦研究	白銀 淳子
西鶴	小島 吉雄講師	良寛の研究	井上 敬子	浄瑠璃の盛衰	杉本美智子
浄瑠璃	横山 正講師	室生犀星文学の背景	井上美恵子	西鶴研究	砂川 幸子
近代短歌	安田喜一郎講師	西鶴の文学	位田 康子	歌舞伎黄金時代	田村千代子
国文学演習		大衆文学研究	石田たづ子	林芙美子論	武内 菊子
竹取物語		平家物語の女性	今西美伊子		中尾 良子
大鏡	竹内美千代教授	紫式部日記にみる紫式部の宮仕へ生	活		
山家集	原田 芳起教授	伊東静雄論	岩佐 幸子		
近代詩	安田 章生教授	平家物語に見られる女性	岩田久美子		
	安田 章生教授		植木 佳子		

昭和三十八年度卒業論文題目

昭和三十八年度卒業論文題目

江戸時代滑稽本に見る人間の笑い
 沼田扶美子
 野口 紀代
 中島敦研究
 堀辰雄研究
 徒然草の研究
 清少納言
 永井荷風論
 太宰治論

松本 光永 「暗夜行路」を通してみた志賀直哉論
 高村光太郎「智恵子抄」論
 丸山 淑子
 世阿弥における能楽論「花にっ
 て」
 水田百合子
 世阿弥研究―世阿弥における幽玄―
 村田 昌子
 山下 郁子
 若山牧水研究
 吉宗 順子
 龍口 峯子

贈 書 ▲昭和三十八年十月～同三十九年九月

跡見学園国語科紀要 一二
 跡見学園国語科研究会
 江戸貞門俳諧の研究 成蹊論集特別第一号
 森川 昭
 香推瀉 第九号
 福岡女子大学国文学会
 学苑 三八年一〇月、十一月、十二月、三九年一月、二月、三月、五月号、七月号
 昭和女子大学光葉会
 学術研究 第一二号
 早稲田大学教育学部
 学大国文 第七号
 大阪学芸大学国語国文学研究室
 金城国文 第一〇卷第二号、第三号、

徒然草の研究 松本 光永
 第二卷第一号
 金城学院大学国文学会
 金城学院大学論集 第八号
 金城学院大学
 甲南国文 第一一号
 甲南女子短期大学国語国文学会
 国語学研究 第四集
 東北大学文学部「国語学研究」刊行会
 国語国文学 一三、一四
 名古屋大学国語国文学会
 国語国文学会誌 第七号
 学習院大学国語国文学研究室
 国語国文研究 第二七号、第二八号

北海道大学国文学会
 国文 第二〇号、第二二号
 お茶の水女子大学国語国文学会
 国文学 第三五号、第三六号
 関西大学国文学会
 国文学、漢文学論叢 第九輯
 東京教育大学文学部
 国文学研究 第二八集、第二九集
 早稲田大学国文学会
 国文学叢 第三二号
 広島大学国語国文学会
 古典論叢 第九号
 有吉 保
 語文 第一五輯、第一六輯、第一七輯
 第十八輯
 日本大学国文学会

- 語文研究 第一六号、第一七号
九州大学国語国文学会
実践文学 第二〇号、第二一号、第二二号
実践文学会
女子大國文 第三二号、三三号、三四号
京都女子大学国文学会
人文科学科紀要 第三二輯
東京大学教養学部人文科学科国文学、漢文学研究室編
人文論究 第二四号
北海道学芸大学函館人文学会
成城文芸 第三四号、第三五号、第三六号
成城大学文芸学部研究室
鶴見女子大学紀要 第一号
鶴見女子大学
日本歌謡研究 創刊号
日本歌謡学会
日本文学 一九六三年九月、一〇月、十一月、十二月、一九六四年一月、二月、五月、七月号
日本文学協会編、未来社刊
日本文学 第一一号、第一二号
立教大学日本文学会
日本文学研究 第二六号
- 明治大学和泉校舎研究室紀要
日本文芸研究 第一五卷第二号、第三号、第四号、第一六卷第一号
関西学院大学日本文学会
文学論集 第五輯
佐賀大学文理学部
文芸研究 第一一号
明治大学文芸研究会
文芸と思想 第二六号
福岡女子大学文学部
平安朝文学研究 第十号
早稲田大学国文学会平安朝文学研究会
法文論叢 第一五号
熊本大学法文学会
宮城学院女子大学研究論文集 第二四号
宮城学院女子大学文化学会
立命館文学 一九六三年八号、九号、一〇号
りてらえやはにかえ第六号日本書房
論究日本文学 第二二号、二三号
立命館大学日本文学会
山辺道 第一〇号
天理大学国文学研究室
和洋国文研究 創刊号
和洋女子大学国文学会

樟蔭国文学 第二号

昭和三十九年十一月十五日印刷
昭和三十九年十一月二十日発行

編集者 大阪樟蔭女子大学
国文学会
(代表者 安田章生)

印刷所 布施市長登二ノ七六
中村朝日堂印刷所

発行所 布施市長登西二五八
大阪樟蔭女子大学
国文学会

